

大学図書館における認知症スティグマ低減のための啓発活動

長谷川 結子

日本は超高齢社会であり、認知症の人の割合は増加傾向にある。2018年には、認知症の人の数は500万人を超え、65歳以上である高齢者の約7人に1人が認知症と見込まれており、認知症という名前の周知と共に、社会全体で認知症を理解し、正しく知ることが求められてきている。しかし、依然として認知症に対してのスティグマが課題となっており、認知症への理解、スティグマ低減を図るためには、まず認知症について関心を持ってもらうこと、知ってもらうことが必要である。

本研究は、日本が超高齢社会であり、認知症の人の数が増加している現状を背景として、認知症に対するスティグマを低減させるための啓発活動として認知症サポーター養成講座を行い、講座前後でアンケート調査を実施することでその効果を明らかにするものである。さらに、情報発信や地域貢献の役割を担う大学図書館において、学生を主な対象として講座を開催することで、大学図書館で啓発活動を行うことの意味と利点をも明らかにすることを目的とする。

本研究において開催した認知症サポーター養成講座は27名の受講者が参加した。同講座は、主な受講対象である大学生に合わせたプログラムとして進行され、講師の話を熱心に聞く受講者の姿や、受講者同士でグループワークを活発に行う姿が見られた。講座の前後でアンケート調査を実施した。調査項目は、「受講者の属性」、「認知症に関する知識」、「認知症に対する意識」、「講座の評価」という4つの大きなカテゴリで構成し、選択式および自由記述の設問を設定した。

アンケート調査の結果、認知症サポーター養成講座には認知症スティグマを低減させる効果があり、認知症に関する取り組みや活動に対して意欲的な効果をもたらすことが明らかになった。さらに、大学図書館は身近な施設であり、身構えずに行くことができる施設であることから、講座に参加しやすくなるだけでなく、図書館に立ち寄った人にも講座について認知してもらうことが可能であると考察した。

大学生や若い世代を対象とした、認知症について学ぶ機会は必要であり、そのような人たちが参加しやすい機会を提供することが求められている中、今後講座をはじめとする認知症に関する啓発活動をどのように展開していくか、大学図書館で啓発活動を行う場合にどのような工夫ができるかを検討、考察していくことを今後の課題とする。

(指導教員 呑海沙織)